

松岡勲の映画 or 読書案内（4）

ホロコースト証言シリーズ三部作の最終作『メンゲレと私』

オーストラリア映画「メンゲレと私」（監督はクリスティアン・クレネス、フロリアン・ヴァイゲンザマー）を見た。この映画は「ゲッベルスと私」「ユダヤ人の私」に続く“ホロコースト証言シリーズ”三部作の最終作である。私は三部作ともに見てきた。イスラエルのテルアビブ在住でリトアニア出身のユダヤ人、ダニエル・ハノッホ（現在91歳）は、わずか9歳でリトアニア・カウナス郊外のゲットーに送られ、その後、12歳でアウシュヴィッツ強制収容所に連行された。メンゲレは強制収容所の所長で、ユダヤ人に対して＜死の選別＞を行った。当日は先行ロードショーで2人の監督をはじめイスラエルのダニエル・ハノッホのお孫さん（マリア）とのトークセッションがあり、感銘を受けた。（以下、ダニエル・ハノッホの証言のうちいくつか）。

＜選別＞

私の顔に恐怖は現れていなかったと思う。全身を駆使して、元気で有益に見えるようにした。選別を受けた時、彼が人々の用途を見ていたのを、私は知っていた。彼は私の顔をのぞき込んだ。私は恐怖を顔に出さず、まっすぐ背筋を伸ばし、強い人間であるとアピールした。だから残れたんだろう。

メンゲレは、指をさして、「右、左」と振り分けた。いつも白い手袋をはめて、ミイラのような表情だった。（中略）とにかく自動的に殺人を行っていた。選別が終わると、不適合とされた少年は全員、番号を記録されて、バラックへ戻される。私は外で待った。1人がパンを仲間に渡して言った。「あげるよ。僕にはもう必要ないから」。自分がまもなく死ぬことを分かっていたんだ。とても胸が痛んだ。何もで

きないし、誰も救えない。今になって思うと、あれは最も辛い出来事だった。

＜死の行進＞

1945年1月18日、“死の行進”が始まった。ソ連軍から逃れるため、ドイツ西部へ移動させられたんだ。私たちは無蓋の列車に乗せられ、西へと向かった。そしてポーランドのティヒという駅に停車した。兵士を乗せた、ドイツの長い列車が止まっていた。積み荷は弾薬や戦車だった。その列車をソ連軍が爆撃し、我々の列車もやられた。

私はティヒ市内に逃げた。そこにポーランド女性がいたので、食料がないか尋ねると、私を見て「ユダヤ人！ 秘密国家警察（ゲシュタポ）を呼ぶよ」と言った。1945年1月で、戦争末期だったのに、彼女の態度はひどかった。私は列車に戻った。そのお陰で、ゲシュタポから逃れられた。列車が再び動き始めた。雪が降り、極寒だったが、無蓋の列車だから、寝られる場所に寝るしかない。雪をよけるために、死体の下に潜り込んだ。目に見えるのは青空か夜空、雪や雷。そして、死だ。死体はすべて凍っていたから、臭いもしなかった。

＜解放＞

でも、欲しかったのは食料ではなく、鉛筆と紙だった。強制収容所は厳しくて、紙も鉛筆も所持を禁止されていた。だから、ずっと書きたいと思っていた。私は鉛筆と紙を手に取り、一晩中、文字を書き、絵を描いた。あれは自由の象徴だったのだろう。一種の解放感だった。文明社会に戻ってきた。そう感じた。そんな人間に戻れて、私は満足だった。